初診時聴力が聴の突発性難聴の検討

○ 谷野 懲1、小田 悟2、太田 豊2、久松 雄志2、佐々木 智2、市島 龍2
1）汐田総合病院耳鼻咽喉科 2）東邦大学第一耳鼻咽喉科

1．はじめに
突発性難聴の初診時聴力レベル、およびその聴力型は多様であり、またその子後も治療から不変まで様々である。その中でも初診時の聴力が全ての周波数でスケールアウト（以下 S.O.と略す）すなわち聴の症例の予後は他の聴力レベルのものに比べ、最も不良であることは、数々報告されている。
しかしこの聴力の予後は、不良ながらも回復を示す例と聴のままの例を持つ。また回復を示す例でもその時期が異なり、固定時の聴力レベルも異なる。このように聴力のスタートラインは検査上全く同一でも、経過や予後が異なる要因について、年齢、めまい、前庭障害の有無、治療開始病日、聴力経過などの条件を加味した上で検討した。

2．対象および方法
平成3年4月から平成13年3月までの10年間、当科を受診した突発性難聴のうち、低音障害型および陳旧例を除いた新鮮例（発症後2週間以内）は316例であった。そのうち初診時聴力が全ての周波数でS.O.の症例は14例（13.0%）で、男性15例、女性26例、年齢は13歳から78歳まで、平均年齢は52.7歳であった。治療は殆ど全ての症例で入院の上、ステロイド漸減療法を施行し、平成7年度以降は、プロスタグランディン療法も併用した。聴力回復の判定は厚生省突発性難聴研究班による判定基準に従った。また各症例の聴力改善率（(初診時患側聴力-固定時聴力)÷(初診時患側聴力-初診時健側聴力)×100%）を算出した。さらに固定時の聴力レベルは厚生省急性高度難聴研究班の基準に従って重症度分類を行った。

3．結果
全症例の聴力回復の判定では、治癒は認めず、著明回復は18例、回復は13例、不変は10例であった。図1に各年代別の症例数とそれぞれ聴力子後を示した。40歳未満の症例数は少なく、40歳以上の症例数全体の75%を占めていた。また50歳未満の不変例は15例中2例（13.3%）、50歳以上の不変例は26例中8例（30.8%）と50歳以上の症例で不変例の割合が高かった。これに対し10歳代は3例とも全て著明回復であった。

図2は聴力が固定した時の5周波数平均聴力を10dB毎に区切り、その症例数を示したものである。80dB以上、90dB未満の症例数が最も多く、次にS.O.のままの例が多く認められ、2峰性を示した。また重症度分類では殆どの症例（90.2%）がGrade 3・4に属した。

図3に聴力改善率を10%毎に区切り、その症例数を示した。改善率が10%未満の例と20%以上30%未満の例がそれぞれ9例ずつで最も多く、改善率が20%以上の症例は改善率が高くなるほど減少しており、5周波数平均聴力と同様に2峰性を示した。

最後に固定時聴力レベル別の臨床像を重症度分類に従い検討した。（表）平均年齢はGrade1の症例を除き、大きな違いは認めなかった。男女比はGrade4のみ同数で他は女性が多くかった。めまいの随伴例はGrade1の例を除きGradeが上がるとその比率が上昇したが
半規管低下を示す症例の比率は Grade 3 で最も高かった。治療開始病日の平均は Grade 1 を除き Grade が上がるに従い遅くなる傾向を認めた。気導聴力が初めて出現する病日の平均も Grade 1 を除き、Grade の上昇とともに遅くなる傾向を示した。聴力が固定する病日の平均は Grade 2-4 の間で、大きな違いは認めずおよそ 1 ヶ月半頃であった。

4. まとめおよび考察

今回、初診時聴力が聴の特発性難聴 41 例について検討したところ、予測された様に、全体として予後は不良な例が多く、50 歳以上に変例の割合が高かった。治療は 1 例もしく著明回復が最も多かったが、実用に供する聴力には程遠く、たとえ聴力が改善しても固定時の 5 周波数平均聴力は Grade 3 に属するものが殆どであった。しかし Grade 別にその臨床像を検討したところ、Grade の軽いものは軽いものに比し、治療開始病日がより早くまた気導聴力もより早期に出現している傾向を認めた。このことより初診時聴の特発性難聴でも、早期に治療を開始し、早期時期に気導聴力が出現したものは、その後の聴力改善の余地が残されている可能性もあり、少なくとも聴力がおおむね固定する発症後 1 ヶ月半頃までは十分な治療と経過観察の必要があると思われた。

表  固定時聴力レベル別の臨床像

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>Grade 1</th>
<th>Grade 2</th>
<th>Grade 3</th>
<th>Grade 4</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>症例数</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>23</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>平均年齢</td>
<td>25</td>
<td>55.0</td>
<td>50.7</td>
<td>58.9</td>
</tr>
<tr>
<td>男 : 女</td>
<td>0.1</td>
<td>1:2</td>
<td>7:16</td>
<td>7:7</td>
</tr>
<tr>
<td>助成可能例</td>
<td>1/3(66.7%)</td>
<td>19/23(82.6%)</td>
<td>11/21(52.4%)</td>
<td>13/14(92.9%)</td>
</tr>
<tr>
<td>C P 例</td>
<td>1/3(33.3%)</td>
<td>1/3(33.3%)</td>
<td>2.6</td>
<td>5.9</td>
</tr>
<tr>
<td>治療開始病日 (平均)</td>
<td>5</td>
<td>1.3</td>
<td>2.6</td>
<td>5.9</td>
</tr>
<tr>
<td>気導聴力出現病日 (平均)</td>
<td>6</td>
<td>3.3</td>
<td>8.0</td>
<td>26.3(6例)</td>
</tr>
<tr>
<td>聴力 固定病日 (平均)</td>
<td>30</td>
<td>43.0</td>
<td>39.9</td>
<td>46.7(6例)</td>
</tr>
</tbody>
</table>